

いの町史編さん室だより(No.2)



広報9月号内に掲載の「いの町史編さん室だより」はご覧になっていただけましたでしょうか？ 町の平成26年合併10年を機に、新しい「いの町史」の編さんを進めている町史編さん室では、町民の皆さんが参加した町史作りを目指したいと考えています。つきましては、町史編さんに使われるのではないかとと思われる資料・写真などがあれば、ご連絡ください。

それでは、今月のためになる話をご覧ください。

編さん室からのためになる話

紙業担当 町田 好徳

いの町の偉人 吉井源太

土佐の紙業を支えた多くの先人たちが輩出してきたのが、いの町です。今回はそのひとり、吉井源太についてご紹介します。

吉井源太は時代が幕末に向かう1826(文政9)年、伊野村(現いの町)で代々製紙業を営んできた土佐藩「御用紙(ごようし)漉き」の家に生まれました。源太の業績はまず、今に残る「土佐の大桁(おおげた)」と呼ばれる紙漉き器の改良から始まっています。

1858(安政5)年に江戸へ上った際、市中で紙の消費量を調査し、その多さに驚くとともに、今の漉き方では、これらの需要に応じられないと結論します。そして、「品質を損ねることなしに、今までの2倍、3倍の紙を漉こう」と志し、1860(万延元)年、試行錯誤の末に、大半紙6枚取り・小半紙8枚取りの、画期的な紙漉き器を完成させたのです。

これによって生産は飛躍的に向上し、土佐紙業界は急激に発展して、「紙業大国土佐」の基礎を確立しました。その後、明治期になると複写用のコピー紙(※現在のコピー紙とは違います)や土佐典籍帖紙(美濃の紙を改良したもの)など、世

界から注目される新しい紙、つまり、薄くて強い和紙が、源太の手によって、次々と開発されていきます。

さらに、外国の博覧会に紙を出品して、度々優秀な賞をもらうなど、土佐和紙の名を世界に知らしめました。また源太は技術の普及にも熱心で、日本各地から要請を受けて出向いたり、人を派遣したりして、紙づくりだけでなく、原料の栽培をも指導するなど、殖産興業に尽くしました。高知県内にもずいぶん巡回指導をしており、仁淀川流域でも楮や三椏の生産を指導奨励しています。

晩年には、開発した数々の紙の漉き方を細かく記述するなど、製紙研究の集大成となった「日本製紙論」を著した吉井源太。「紙聖(しせい)」と賞賛されたその人柄は物欲や名誉欲にはほど遠く、これらの功績をもって自らが経済的に潤うことなく、1908(明治41)年にその生涯を全うしました。



情報提供のお願い

1 紙業担当 町田 好徳 吉井源太に関する情報や古い和紙に関する情報のお願い

吉井源太に関わる話や、古い和紙などが身近に残っておりましたら、是非事務局までご一報ください。

2 みらいの章担当 中村千代重 「本川の碁石茶」をご存じですか！

碁石茶と聞くと、大豊町の碁石茶を思い浮かべるでしょう。ところが日本川村教育委員会発行の本川の生活誌には次のように述べられています。

「元禄の末(1700年ごろ)の書物「南路志」によれば、茶は本川郷十二ヶ村で栽培され、茶の名産地として有名なりと記されている。土佐では、香美郡の大抜茶、高岡郡の穴蔵茶、本川郷の碁石茶が三大名産地であったようである。(中略)本川郷の名産だった碁石茶ですが、その製法が受け継がれることもなく、時代の流れと共に、消滅の危機にある。この碁石茶の製造は大豊町の一部集落で受け継がれており、マスコミが度々報道している。碁石茶の製法については、本川の文化遺産として、是非とも残し後世に伝えたいと願っているのである。」

土佐の三大茶の一つといわれた本川郷の碁石茶がどうして、現在に受け継がれなかったのでしょうか。どなたか碁石茶に関する資料、情報などがあればご連絡ください。ちなみに、本川の新郷土館には碁石茶が展示されています。

3 防災担当 門田 勲 高知県消防学校の建物の写真提供のお願い

昭和32年設立当初から現在までの高知県消防学校の建物の写真を探しています。お持ちの方がいましたらご一報ください。

問い合わせ・連絡先

いの町教育委員会社会教育課 町史編さん室(内線31)

☎ 893-2012 ☎ 893-2013